

Fox-Fordyce 病に対する手術療法

藤山 忠 昭, 蔵 本 陽 子

激痒を伴う Fox-Fordyce 病に対する治療は従来、ホルモン療法や外用療法等、種々試みられているが、その効果は期待できない。そこで我々は 2 症例に対して手術療法を試みたところ、きわめて満足すべき結果を得たのでここに報告する。

症 例

症例 1 23 才, 女。

初診: 昭和 55 年 9 月 20 日

既往歴, 家族歴: 特記事項なし。

現病歴: 約 1 年前より両腋窩に掻痒性皮疹が生じ, 2, 3 の皮膚科医にて種々軟膏療法をうけるも全く効果がみられない。又, 時には疼痛性皮下硬結が生じる。掻痒は発作性で, 特に朝と夜に激しい。

現症 (図 1, 2): 両腋窩に毛孔性の丘疹が集族し, 腋毛は粗となり短く切れ, 更には全く欠如する。腋窩全体に瀰漫性の色素沈着を伴う。そしてこのような毛孔性丘疹は乳暈部, 下腹部から恥丘にかけて, さらに外陰部にも散在性ないし集族性に認められる。

病理組織所見 (図 3): 毛囊開口部が多量の角化物により閉塞され, これに近接する形で, アポクリン腺開口部近傍に定型的な海線状水疱が形成され, 白血球の遊走がみられる。さらに真皮では血管周囲性の細胞浸潤や, アポクリン腺の部分的な拡張が認められる。

手術方法 (図 4): 昭和 55 年 10 月 28 日, 両腋窩に対して手術療法を行った。その手技は腋窩中央にて皮膚割線一致性に皮切をいれ, それによって生じる左右の皮弁を反転しながらできるだけ腋窩全域の真皮深層から皮下組織, すなわち毛根・アポクリン腺を丁寧に切除する。次いで止血を十分



図 1. 腋窩, 乳暈部の丘疹

に行った後各皮弁に排液孔を 2~3 ケ所作成して切開線を縫合して術を終る。そして tie-over 固定を 2 日間, さらに圧迫固定を約 1 週間持続した。

経過 (図 5): 術後まもなくより掻痒は消失, 術後 2 年 6 ヶ月現在, 掻痒は全く訴えず, 再発の徴候は認められない。又, 腋窩の色素沈着は褪色して健常皮膚に近ずき, 手術痕もほとんど目立たず, 整容的にもきわめて満足すべき状態である。

症例 2 25 才, 女。

初診: 昭和 58 年 1 月 13 日。

既往歴, 家族歴: 特記事項なし。

現病歴: 19 才頃より両腋窩に掻痒を訴え, 最近増強の傾向がある。症状は生理日前になると増悪する。

現症: 両腋窩に毛孔性丘疹が集族し, 腋毛は粗



図2. 図1腋窩の拡大像

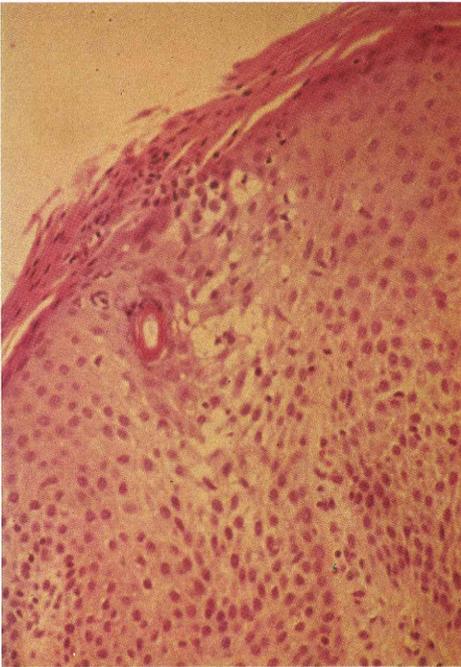


図3. 表皮内の水泡形成

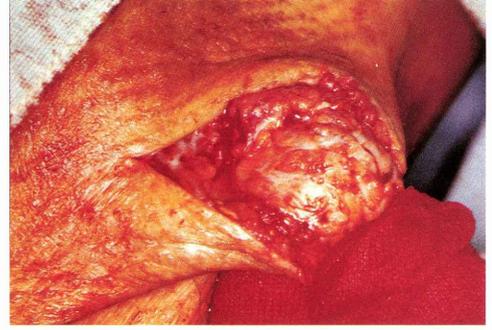


図4. 反転された皮下組織



図5. 術後2年の状態

となっている。その他の部位は正常であった。昭和58年2月15日、症例1と同様の手術療法を行った。

経過：術当夜より掻痒は全く消失し、再発の徴候も認めず、良好なる経過をたどっている。

考 按

Fox-Fordyce病は1902年FoxとFordyce¹⁾が最初に発表して以来、文献的には300例²⁾余りの記載がみられるが、本邦に於ては教科書に僅か

ばかりの記載がみられる他ほとんど詳細な報告はなく、比較的まれな皮膚疾患である。その臨床症状は主として腋窩に、あるいは乳暈や陰部に発生する毛嚢性丘疹が特徴であり、激しい発作性の瘙癢を訴える。原因³⁾は明瞭でないが、アポクリン腺に障害があり、アポクリン腺の導管部に角化閉塞が生じ、その破裂によって分泌液が表皮や真皮内に浸入し、痒みを誘発すると考えられている。罹患性別および年齢は圧倒的に女性に多く、13才から35才間に発生し、人種間に差はみられない。我々の症例もまた、年頃の若い女性に限られ、痒みは生理や感情の変化に関連があるように思われた。治療³⁾はエストロゲン等のホルモン療法、副腎皮質ホルモン療法、あるいはその外用や局所注入、X線照射が試みられるが、すべてその効果は期待されるほどのものではない。我々の症例に於ても当初、副腎皮質ホルモンの外用療法を試みたが、その効果はわずかで一時的なものにすぎなかった。外科的療法^{3,4)}は切除等の記載がみられるが、その方法や効果は不明である。単なる切除縫合による手術なら必然的に醜い手術痕を残すことになり、我々はちゅう躇するものである。今回試みた手術療法、すなわち反転法による腋窩皮下組織切除術は我々が昭和40年代の初期より腋臭症に対して好んで行い、好成績を得ている手術手技であるが、師井⁵⁾の報告もあり、腋臭症に対してはかなり普及していると思われる方法である。

すでに述べた通り、この手術療法はアポクリン腺を切除するため、自覚症状は術直後より劇的に消褪することが特色であり、しかも手術後の瘢痕はほとんど目立たず、美容的にもきわめて満足すべき結果が得られることである。只、アポクリン腺の再生に関する問題が懸念されるが、第1例は2年7ヶ月経過した現在、再発の徴候は全く認められていない。以上のことより、この手術療法は本疾患に対して試みるべき価値のある、すぐれた治療法の一つと考えられる。

本稿の要旨は第23回日本形成外科学会東北地方会に於いて発表した。

文 献

- 1) Fox, G.H. and Fordyce, J.A.: Two cases of a rare papular disease affecting the axillary region, with a report on the histopathology. *J. cutan. Dis.* **20**: 1-5 (1902).
- 2) B. MEVORAH, G.S. DUBOFF and R.W. WASS.: Fox-Fordyce Disease in Prepubescent Girls. *Dermatologica.* **136**: 43-56 (1968).
- 3) THOHMAS, B. FITZPATRIK.: *Dermatology in general medicine.* 390-394 (1971).
- 4) D.C. MACMILLAN.: Fox-Fordyce Disease. *Brit. J. Derm.* **84**: 181 (1971).
- 5) 師井庸夫: 腋臭手術の一考察とその遠隔成績. *皮膚科の臨床*, **9**: 295-299 (1967).

(昭和58年7月1日 受理)